

又、このうち、日蓮宗関係のものは二十四伝とその数に於いて多くはなかった為、殆ど問題にされなかったが、日蓮関係の僧伝のうちで、列伝体の僧伝として出版されたものは、竜華歴代師承伝等元政の伝記書が最初であったといえよう。

(註)

- (1) 磯野本精著 日蓮宗史要 三頁
- (2) 執行海執著 日蓮宗教学史 二四七頁
- (3) 本朝法華伝 一丁
- (4) 清水龍山閣原文対照困訳扶桑隱逸伝二頁
- (5) 音馬夷藏訳 龍華歴代師承伝十三丁
- (6) 龍華歴代師承伝二丁
- (7) 「伝灯抄」より「当家諸門流繼因之事」迄は日蓮宗宗学全書史伝旧記部(一)所収
- (8) 日蓮宗宗学全書史伝旧記部(一)一八三頁以下
- (9) 日蓮宗全書本 三四六頁
- (10) 日蓮宗全書本 四一一頁
- (11) 日蓮宗全書本 四六八頁

『日蓮聖人の良源観』

牧 野 博 悠

こゝに日蓮聖人の良源観と題して、吾祖の態度を窮めるのに、祖伝中にその記述殆んど無に等しく、三箇所の抽象的記述がみられるのみである。そこから聖人の良源に対する吾祖の態度を求むるに無理はあろうが、少ない記述には聖人が良源に対して、それなりの考えがあったからであろうし、そこには聖人の関心及びとらえかたを示しているものと考えられる。それらを求むることによって自然と聖人の良源観が出てくると考える次第であり、それをこゝに述べんとするのである。

良源を伝える祖伝は先に述べたごとく、三箇所を数えるのみである。つまり、正元元年(一二五九・三八歳)伊豆流罪以前に法然の撰撰集を破して、念仏無間であるとしたり「守護国家論」、文永九年(一二七二・五一歳)佐渡一の谷にて四条金吾殿に不退の信仰を進めた「四条金吾殿御返

事」、そして弘安五年（一二八二・六一歳）入滅三ヶ月前の七月に書かれたという「法華本門宗要抄」である。

このうち「法華本門宗要抄」は偽作の疑いがあるのではあるが、良源については、先の二書と同内容であることから、偽書としても、その良源観に影響はない故、こゝでは真偽を問わず、先の二書と同様に扱うこととする。

さて本題であるが、日蓮聖人が取らえた良源はいかにあったであろう。

「守護国家論」に

日本国源信僧都亦叡山第一八代座主慈慧大師、御弟子(以下)也。

と、慧心僧都の師であることを「亦」として述べているのである。

「四条金吾殿御返事」に、さらに、

日本にしては伝教より義真・円澄・慈覚等相伝して弘め給ふ。第一八代の座主慈慧大師なり、御弟子あまたあり。其中に檀那・慧心・僧賀・禅瑜等と申て四人まします。

と、檀那僧正覚運・慧心僧都源信・僧賀・禅瑜の四人を良源の弟子の代表にあげられているのであり、さらに

「法華本門宗要抄」には

次、五百年、伝教・義真・慈覚・惠亮・惟尚・理仙・慈慧

・増賀・惠心・覚超等已上十人像法五百年法(三七)

と、法華経迹門の弘通の人として述べているのである。

こゝに「守護国家論」に『亦』・「四条金吾殿御返事」

に『伝教より義真・円澄・慈覚等相伝して弘め給ふ。』として文章を切り、『第一八代』とあらためて、良源以下を書き続けている。この故はどこにあるのであろう。

「守護国家論」にみられる慧心は良源の弟子であるといっていること、そして、それが「四条金吾殿御返事」の次下

法門又二に分れたり、檀那僧正は教を伝う、慧心僧都は観を学(六三)ぶ

と、あることから、良源が慧心・檀那の観・教を教えた師であったことを強調したいがためと考えられる。

よって聖人の良源に対する関心は慧心の師であり、観を

教えた師としてであったのである。

では良源の観門とは、如何なるものであったであろう。

そして聖人の態度は如何にあったであろう。

良源の「一代決疑集」に

疑云、一家観門其相如何、答観心深義顕露不可授。

但以密語、誨一人、何者本師釈迦大師秘之不说

妙法蓮華機已熟、説法華本迹二門、況一家観門超本

迹二門、惟在観心秘中秘也 (1)

と、いつているごとく、観門は本迹二門の法華経よりすぐ

れ、観心こそ秘中の秘としてしているのである。

これ聖人が「撰時抄」に

安然和尚と中叡山第一の古徳、教時諍論と申文に九宗

の勝劣を立られたるに、第一真言宗・第二禪宗・第三天

台宗・第四華嚴宗等云云 (四四)

と、述べられているように安然が「教時諍論」にて、法華

を密禪の下に置いた思想、この思想をさらに良源は、止観

は法華に勝るといつているのであり、

これ聖人が「立正観抄」に

当世習天台教法之輩多貴観心修行、捨法華本

迹二門見 (八四)

と、今の天台を学ぶ者は、観心を貴んで、法華経の本迹二

門を捨てる者なりといひ、さらに同抄に

本朝天台宗、法門者自伝教大師始之、若夫台止観不

依者、於日本背伝教高祖、於漢土背天台、兩大師

依法既依法華経、豈其末学違之乎。以违知、当世天

台家人々其名雖借天台山、所学法門依達磨、僻見普無

段、妄語云事 (八五)

と、宗祖伝教に背き、又天台にも背いているとし、非難し

ているのである。

これを以て見るに、法華より止観がすぐれたると述べた

良源を聖人がその破折の一端としていっていると見てよいてあ

らう。

又この止観は法華よりすぐるという思想はさらに「極楽

浄土九品往生義」に、観経九品段を天台の観経疏の文を随

釈して、それに養寂等の論釈を引き、深くその意を明して

おり、その著しき特色は、その書に「今観無量寿経。以

明^ニ四十八願^ニ」と述べられているごとく、四十八願を願名と経文とに亘って概説し、異訳そして他経を引き、又義寂等の釈義の四十八願を悉く引き、それに私釈を加えて、一つの四十八願釈を構成していることにみられるように、

又、慈悲大僧正伝に、臨終相として、

和尚合掌^ヲ西面^ヲ誓^フ曰^ク、我所^ニ修^ス普^ク根^ヲ悉^ク資^ヲ菩^ト提^ス。兼分^ニ兼修^ス。廻^シ向^シ一切^ノ衆生^ニ。命終^ノ終願^必往^ニ生^ニ極樂^ノ世界^ニ矣。口念^ニ弥陀^ニ。心觀^ニ実相^ニ。機縁^云尽^ス。遂^ニ以^テ入滅^ス。(2)

と、あるごとく、西方願生に存し、その行実^ニに於て、天台教学の実践は弥陀念仏に存し、それは觀念念仏に走つたのである。これ密教と密着していたこれまでの天台が、本来の觀念中心に立ち戻り、天台円宗の成仏法の完成の第一歩を踏みだしたのが良源であり、又密教の立場について、「草木発心修行成仏記」に、

又云、真言勝、天台劣云云。努^レ不^レ可^レ爾也。常同別故。真言天台或一或二也。伝教、慈覚兩大師乃至古徳釈中其義明鏡也。豈有^ニ円家真人^ニ可^レ不^レ信^レ之耶^乎。(3)

と、あるごとく、従来の顕劣密勝の態度から、伝教に復古

せんとする努力があったのであり、こゝには、本覚思想の発芽、天台円教の立場がみられ、密教偏重はなかったのである。

これらの思想の発展は慧心によって継がれており、聖人が四糸金吾殿御返事に述べられたごとく、慧心は良源より觀を学ぶとし、良源の教学は、慧心によって大成されたとみていたようであり、慧心を持ってその中に良源を含み破折していると考えるのである。

註

(1) 叡山天海藏(叡山文庫)所収 頁三九

(2) 群第五輯卷六九、頁五六〇

(3) 仏全二四、頁三四六

持経者道命をめぐつて

——読経・歌詠み・サロン——

鈴 木 治 美

道命を持経者と規定した記録は『大日本国法華経験記』